

搖根

青木咄鷄遺句集



青木咄鷄遺句集

揺 根



咄鶏の鳴き交したる夜寒かな



目次

か い げ ん	〈大正13年～昭和初期〉	1
か わ た れ	〈昭和29年～昭和38年〉	3
も と だ ち	〈昭和39年～昭和48年〉	20
め は ち ぶ	〈昭和51年～昭和59年〉	51
す み な わ	〈昭和60年以後〉	105

かいげん

水牛の目になだれこむ大西日

防人の半袖姿子に残す

露しとど花子に低き北斗星

かたわれ

元朝を生業に聞く戸いちまい

大鴉羽^ばばたき冬木露わにす

黙し合う距り氷菓溶けいそぐ

爽かや缶詰を切る孤独音

赤蜻蛉戒律といて修道尼

百千のはじめの虫音紙均らす

秋声の容ちとなりて僧坐わる

拭き了えて雑巾絞るいわし雲

裸木や女は影を失なえり

春愁に馴れし一人の扉を開く

ある摂理歪みしままに糸瓜垂れ

枝豆のつるりと跳んで海戻る

冬川へ捨てる芥の重たい音

寒鮎の生きる力を掌に掴む

魔法壘哭いて刻めり夜の秋

蝗追う声が没り日を疾くする

春の渦に乗りて裸になる心

灼ける石並べて昏くいる石屋

秋の翳げふかぶかと抱き大蘇鉄

こうろぎや白い闇生む冷蔵庫

青嵐杭打つ音が遅れてくる

寒林の奥へおくへと胸研がれ

ねんねこの男が街を明るくす

夜を嫁ぐ一家へ壺の梅ひらく

緑蔭や翳^{かげ}げを多角に石据^いわる

羽根^{はね}抜^ぬけて驚^{おど}きやすし鶏^{けい}の頸^{けい}

月の視野^{しや}展^ひけ佇^たしくなりし鼻^び

集^あ金^ま鞆^{たも}の口^{くち}が巨^{おほ}きい花^{はな}さぼてん

鉛管を切る爽やかに生まの音

飛爆音球形寒いガスタンク

春眠の断片遠く皿割れる

春愁や少女に粗らき言葉殖え

氷挽き了えて少年昏らくなる

年用意軋んだ椅子に釘を打つ

春光や棒立つに水晶印捺され

メーデーや積荷底から濡れてくる

星一つ流れて消えることば尻

秋蟬やぎりぎりに浮き一流木

柿は高さで没り日を離すまいとする

秋芽立つ木瘤や疼く五十肩

山茶花や身に東京が遠くなる

北風に押され揃わぬ妻との歩

青き死や雪夜をからの魔法壇

世に賭ける目でなし梅に見くだされ

骨埋める土なし冬野広すぎる

歩む外なし向背に霞満ち

春の海見し目で妻を包みたし

抽斗に錆びたアルミ貨卒業す

消されたくなし芽の森に深入りし

快調な胃をまん中に囓れり

新緑の手応え窓を拭き上げる

爪立てる蟹や水着は胸で来る

蝮消え白日何も動かせず

青竹へ水澄むことを強いられる

草紅葉恍惚と杭打ち込まれ

木の实掌に転がしてみても地にもどす

元旦の灰皿が先ず汚される

妻が焚く霜旦の飯濃く匂う

白い時間書けないことに執着し

じつくりと雪踏み偽悪者ともなれず

空蟬の鋭き瞳のありぬかくれんぼ

穂芒と吹かれ清潔なり学帽

折れた鉛筆窓の全面枯れ兆す

もとだち

寒月や息とめている毛穴たち

免がれぬ母の死遠く野火凝まる

ふくろうや耳を巨きく母死せり

失くすことに馴れた手冷えて母亡くす

信じるものなし蜻蛉は海へ出る

寝ることもしごとびっしり蔦からむ

秋の耕綱持てば牛歩きだす

梳けば散る白髪父系既に絶ゆ

元旦を吹かれ明るい無一物

雪の祝日旗一本が重たい村

囀りの城と吹かれて庶民たり

黍あらし妻の軍歴知らされる

サングラスの氾濫ぼくの空がない

原爆忌くるあいまいに中年期

星流れ戸籍の生母既になし

遠巻きの冬へ汚れて空らコップ

あおあおと海を見て来て献血す

梅干され民話の里に男減る

緩慢な月の出飢えの来つつあり

明るくて昏らくて霧のおとこ徑

障子貼り終えて黄色人種たり

爽かや孕み女胸を張って来る

深閑と二月の罨が仕掛けられ

妻の背があり柔らかし昼の梅

春の雪より瞭らかに白髪は

桃咲いて村が一つの貌になる

眞実を書くに悴み一本気

衣更えしことを継ぎ目に私小説

海感じおり籐椅子の足のうら

祭笛吹きいきいきと蕩見たり

夏足袋や一つの不幸過ぎゆけり

いわし雲背骨より老来つつあり

コスモスの図書室足長少女殖え

餅吞んで太平洋に穴があく

春雪やうしろのくらい置時計

囀りの丘の童話に入りこむ

母の日の淋しい雲に突き当る

傘借りて植田の畦に落ぶれる

屠られに行く牛朝の虹くぐる

茶摘唄真青に空降りてくる

原爆忌柱に錆びて抜けぬ画鋏

梅漬ける婆総身に隙見せず

鈴虫を飼いまつくらな耳にする

墓場から子供の匂い赤とんぼ

悪童のままに齡とる貝割菜

ある挫折並びて葱の先とがる

正月の無為掌を過ぎつあり

椿盈つ谷一族の短か指

皆既月食生あたたかき甕の口

手袋の穴真実の友と会う

訝透くたんぽぽよりも低く棲み

白玉の艶がくがくと妻老いぬ

父の忌の青き岬へ足濡らす

紫陽花のはらわた黒き夜となりぬ

朝の虹臨終へ来し配膳車

雁来紅この白髪に火を点もせ

菊焚かれ大せつなもの喪なえり

まつすぐに男が帰る返り花

柿かじる農夫自分の空を持つ

雲はもう冬あき曇が直立し

葱折れて星と薄れし由紀夫の死

藁塚の影を離れて寒い人

素つ首という寒きもの母看護る

厚いカーテン繞らせ生き方変えられぬ

炎えており冷えおり花のあしのうら

雪の上に雪ふり悪事もうできぬ

青空の入り口探すかたつむり

急に夏真赤な花を買いにでる

憂曇華が咲き定型の大胡坐

蛍来て家のどこかが響きおり

羊齒原へ美貌をおいて来し老婆

洞抜け異うひびきの秋に遭う

貝割菜遠い所が見えてくる

みの虫と吹かれて晴れる三枚目

婆が来て梅林奥を深うしぬ

裏木戸へ朧が溜まる地獄耳

囀りやゆつくり乾きだす刃物

桜散る夕べは耳をあけておく

白南風の髪に火が点く荒太鼓

つんば棧敷におかれ涼しい石のかけ

蝮消え鋏の力を信じ切る

冬帽子月へ小さくなりゆく

雪となる源流おとこ紋うすれ

爺馬鹿でいる日溜りの賽銭箱

才月のたてがみ白き兵還る

股ぐらに溜まる菜の花いろの暮れ

父棄てに来るまつさらな雪の中

耳かきを探すしーんと夜の雪

電球替えて大根の花遠くなる

たくさんの芽をくぐり来て濡れる眉

仏心や蛙の声がうらがえる

入道雲胸を展けば傷むかな

まつ青に銜が還る黙否権

泉から手を抜き鬼の仲間となる

水かさの滝おんおんと嬰が育つ

何か捨て婆ひぐらしの山下る

月光に汚された遊園地のおとこ

はちす田の枯れざま後へは退けぬ

硝子寒く磨かれ坐る椅子失くす

年詰まる卵がひとつ転がされ

風立ちぬふたりのくらし水中花

夕風へ立つ髪があり紫々夫の死

梅開き水の手応えなくなりぬ

葱抜きし穴三月のうた生れ

みちおしえおのれの墓に突当る

半夏至のかがやき胸の黒釘

汗の数珠会いたいときは目をつぶる

白桃に刀を入れ一つの戒を解く

こうこうと真昼がおもし白絢

八月の樂章黒い紙均らす

八月を極彩色の笑いかな

葉月潮ひたひたと癌進みおり

人影が離れて立木秋めきぬ

墓買って来てからつぼの笑いかな

大輪の菊剪りしより姻りそむ

えっさええっさと冬来つつあり隔離室

赤い満月この冬川は飛び越せぬ

空つ風売れない甕の仲間となる

太き咳大根畑の穴となる

め
は
ち
ぶ

巨き樹を過ぎて妹より寒し

剃刀の刃にうらおもて遠霞

甘藍のきしきし緊まる生き別れ

昼顔の昼を昏らしと思いおり

暗暗とひろしまの日の氷庫

暖色の月の出墓も買いました

穂芒と吹かれて白む向う傷

目も耳もしぐれ木の家紙の家

満月の声充したる甕の胎

木守柿村を閑かにしてしまふ

陽のあたるおとこおくまで森枯れる

霜の華身にしみつきし人嫌い

爺が来て梅林動かなくなりぬ

春寒し頸から細くなるおとこ

ちらと死も見えおり雪の雑木林

鮮らしい掌ばかりあたたかし

ハンカチを拵げて蝶の心かな

海ほおずきひとりの旅はすきとおり

羊齒原の青飛ぶことを考える

親離れする向日葵の明るさで

帰省児へ一本の樹が起ち上る

蛇と対き嶮しきほとけ心かな

ほと藁火風が考えぶかくなる

菊剪られ三時の日向傷むかな

椅子車花野は翔べるかも知れぬ

藁塚の隠し了せしかくしごと

落ちる葉がなくなり少年帰郷せず

蠟燭を点もそう雪へ列車発つ

足音にも心のありぬ夜の梅

完全な消壺爺にある戦後

雲重りする牡丹の遅い午餐

朧濃し声をあげねば火が消える

別れ霜髪の哀れみはじまれり

防音の窓堅くしぬかたつむり

祖の町の祭の端しに腰下ろす

ピーマンが割られ明るいふた心

白シャツの釦は海へみな外す

日本にいつぼんの桐秋立てり

除夜の鐘未だ悪事はし盡せぬ

赫と晴れた初旅の海のはにかみ

敵失くす二月やしーんと白湯が沸き

世離れの身に火が残る一裸木

春眠の浅いところで溺れおり

物干しへおとこが上る青あらし

かーんと海耳遠い日の鳶・鴉

父の日の大きな桐の影に入る

山椒魚ゆらりと月を動かしぬ

湿らせた楔打ちこむひろしま忌

島抜けを考えておりななかまど

坑内深く思いを残す根なし草

すいかずら群れて島抜けもうできぬ

靴脱いで八月の旅のふくらみ

一体の羅漢は父似鴟ぐもり

草の花ぼつんと番地もつ一戸

飢えのいろいろ覚えておりぬ木守柿

うしろすがたばかり目につく十二月

年終るまじめに嘘を書き続け

元日の無聊毛深くなっており

静かに水流す音あり二月尽

満開の椿や水の疲れたる

三月や影たしかめて鶴歩く

洗われし皿のかなしみ鶴帰る

かんかんと瓦が残り花おわる

男が買い夏の参うすぐらし

青胡桃さみしくなりし顔を出す

八月やひろしまに木の橋ができ

いちにち蟬ないて仏をつんぼにす

れんこんの穴の明るさ海女孕む

美しき人の寒さと行きちがう

人容れぬおとこでありぬ山椒の芽

溝凌うおんなの影がよく笑う

朝焼や少年汚れはじめたる

秋暑し知らぬ間に妻の鍵ふえる

白桃を食べし唇ふき旅了る

早り月上りうしろを失なえり

甲斐に入る秋を一途に塩の径

貝割菜明日の雲が見えてくる

千万の露の瞳おとこ毀される

藁を焼く匂いを遠く枯れる川

金色に鉾が目となる初曆

目の粗い餅網こぼれそうに平和

寒色の人参肥えし妻亡くす

枯れられぬ躬深く妻に棲みつかれ

寒旱血の音絶えし掌の厚み

遠かな死海を裸にしてしまう

一本の棒に天と地春立てり

春の月傷がへらへら歩きだす

烏曇目鏡をとればよろめく墓

落椿踏みて仏の顔をせり

春の暮れ何さみしくて紙燃やす

啓蟄や包丁しまい忘れたる

静かなる余生は要らぬ別れ霜

日傘ひらく音の荒さよ花粉症

花の城巨きな石から暮れて来る

国造り論のいろいろ花だいこん

時計草の針が真昼を停めている

藤波をくぐりこの顔変えられぬ

水割りのグラス涼しさ過ぎつあり

行き処なき父の日の水溜まりだす

父の日の太陽進みつつありぬ

海へ出て力ゆるめる茄子の牛

夏大根くねくね姑は達者です

桶に水あふれ八月十六日

ばらばらな簾目迅い秋入り日

晩年とはあやふや錆びて秋の風

私の句が独り歩きをする月夜

穏やかな一日乾く唐辛子

(恐山行六句)

嗶れ山の魂呼ぶ秋の大鴉

黄泉もこの白さか磊と石の秋

蹠らが繋ぐ現し世霊山の秋

山 嘎れの秋 瞭らかな影のこる

岩山へ魂 曳くひとり ずつの秋

硫酸の石人型に冬を待つ

ひらかれぬ抽斗が殖え秋の風

貝割菜親孝行はもうできぬ

かくれんぼの仲間になれぬからす瓜

からす瓜無名の作家にもなれず

みの虫や一寸先はかんがえず

首の青い大根汚れた日が沈む

虎落笛悲しき涙にはあらず

黄落や明るい方へ口あける

青あおと葱の秀が起つ働きに

古井戸の水位は見えず冬の鵲

いつからか冬宥しおり甕の水

喪の終る疾さに伸びて白眉毛

十二月虹の果てざま見ず帰る

どこもかも雪白出番のないおとこ

残されて一人の味の雑煮餅

歳旦を灰皿のいろやわからかし

一坪の霜と点され不眠症

山降りし影より膨れだす枯野

風花や道直ぐなるを悲しめり

梅の風ぎ没り日はよごれはじめたる

冬の虹弓引くカまだ残る

春来つつありおとこの木おんなの木

春寒し硝子の中の父でおり

囀りの空ペン先にあつまりぬ

陽炎やさみしくなれば穴を掘る

小便小僧のうしろがさみし水すまし

死ぬ力なかなかもてず夏に入る

麦こがし妻のまわりの明るくて

魂の国でて虫に覗かれる

めんめんと緑夜身ぬちに水流れ

秋夕焼黄泉はむらさきかも知れぬ

芒にもうしろ姿や神かくし

晴ればれと老来つつあり大花野

鈴虫を飼い柔らかくなる硝子

木守柿青空ひびき易くなる

山茶花のひとひらことばより重し

思い出なき戦歴寒く星流れ

十二月八日溢れる輸入食

抽斗が抜かれて顔を出す寒さ

輪飾りの翳げや二つのものがたり

蓮田の穴放埒に初あかり

声すでに霜の響きを持ちており

さり気なく暮しの中へ開く梅

涸れ沢やうしなうものすでに無し

口下手で生き下手桶に氷張り

足早やに妻の忌夜の柱鳴り

命日の雲刺しており一裸木

春立ちし薪醒く炎えあがる

人參の断面まるし雪解光

働けぬ掌が暮れてくる白椿

春の猫街を一望して跳べり

雪原の夕焼足をうしないぬ

風土記をつづる山葵田いろに水音

春愁や左右異なる掌のぬくみ

涅槃の月がまんまる明日は伐られる木

鬱々とさくら待ちおり麦粒腫

さくら咲きねむりの深くなりしかな

青年の木となり春を揺れており

うたたねの男が泛いており遅日

大あくび日脚の伸びていたりけり

摺硝子のむこうへとけて行くひる寝

藤棚のくらがり古語を育ており

海いろの囀りどこを醒まそうか

届く限りの芽木触らねば明日がない

ピーマンの虚ろや青む齡の胸

蒲公英の絮がまんまるとまる思惟

うすうすと春虹起承つながらず

耳の底にも夏の木の葉が落ちてくる

一頭で象が齡とる落葉松

父の日の胸止り木へおいてくる

八月のひろしま水に色がない

葉月汐の暁け放埒に匙・グラス

蟬の森の懐ろ深し耳なくす

敬老日ぼかーんと呼吸をしていたり

ひきこまれおり黄泉いろに夜光虫

木を過ぎし背や秋立つ五十代

猛り鴟まだ悪役はやめられぬ

紅茸を看過ぎし足うら笑いだす

からす瓜たぐり子離れ親離れ

うつうつと涸れくる黒いいぼむしり

妙齡ののどうすぐらし秋茄子

眞実を言えはあつまるいわしぐも

剃刀の刃が喚んでおり冬の霧

死神にまた見離され冬木の芽

十二月九日靴の紐むすぶ

涸れ沢の極点俺を遠くする

ぼつつりとおき火明日が見えてくる

風がひとりの耳をつれてゆく

雪像の裏もしろがねうらぶれる

落葉音おしまず使う旧紙幣

街師走切符のいらぬエレベーター

呆と歩くうしろへ師走置き去りに

冬帽子真深かに旅の向う傷

す
み
な
わ

白南風や大きな足の跡のこす

青い点滴了る小人が駈けくんだり

大南風並びて細き咽喉仏

少年へ森が緑の扉をひらく

人形にはらわたがあり涅槃西風

耳鳴りに深さがありぬ寒玉子

家という箱を出たがり枯れぬ父

真直ぐに立って仲間のない冬木

広すぎる枯野硝子の靴さがす

八人目の敵極月の胸に立つ

今日がふと消えてしまった霧の橋

涙には月の木立が暗すぎる

もの書きの短かな指や十三夜

反骨が生き甲斐秋の虹鮮か

紅茸を抜きし夜きれいな火を創る

降りきつた血圧枯れて立つ夏木

かなかなの中の私が遠くなる

真青な命も見える蟬の森

切株へ涼しい時間が坐ってる

五つの顔もつ炎昼のダンボール

石あまた脚から虹が消えてくる

花兆す風包丁が研ぎ上る

手の届く芽木解らねば明日がない

流星や戦歴という虚しいもの

芒にもうしろ姿や神かくし

鶏頭花明るき海をかなしめり

正蔭や才神すでに動き出す

一匹で像が年とる落葉松

藤くぐり二度とは海へ帰らぬ兄

折鶴の嘴折らずおく涅槃の夜

令和元年 七月 WEB

揺 根

著者 青木 咄鶏

発行・印刷

有限会社 エーアンドエヌ

小田原市栄町3-22-11